

し体不自由児の職業希望に関する調査研究

——高等部生徒を中心にして——

関 繁 雄*

この研究は、し体不自由養護学校の高等部生徒を主体として、障害を持った子どもたちがどのような職業を希望しているのか、またその理由は何なのかを調査をとおして追求することによって、学年を追って変化する職業、および職業観を知ろうとするものである。その結果、自分の障害に悩み、将来に対して不安を感じるのは、14才前後であり、そのころから選択に乱れが見られ、高等部の2年頃は最高になり、3年の卒業期になるにしたがい徐々に安定してくることがわかった。

I 研究の目的

当校は手足の不自由な子どもを収容している養護学校である。ここに入学している子どもたちに、将来を聞くと、心身のハンディキャップがあるにもかかわらず、バレリーナだの、スチュアデスだの、正常人たちにも難かしいと思われる職業にあこがれる子どもがいる。しかし、実際に卒業して職業についたものを調べてみると、職種が非常に限られ、この種の障害者が適職を得ることが、いかに困難であるかがわかるのである。

これらを解決するには、学校の教育そのものの反省もさることながら、雇用者側の理解、社会一般の認識の高揚、国、地方の法制度の改革等、多くを待たねばならない。しかし、とにかく子どもたちに、社会の門戸は狭く厳しい。この現実の前に子どもたちは悩みながらも、徐々に現実的な職業を選んでいくものと思われる。そこで小学部から高等部までの職業希望を調査し変化の実態を知ると同時に、最も卒業期に近い高等部の生徒が、どのような変化構造をもっているか、またその変化理由はどうか等を、もうすこし詳しく調べ、結果を考察する。

II 研究の方法

1 当校の実態

(1) 分校

施設併設の学校であり、手術や加療、または訓練のために施設に入院してくる子どもに、退院するまで、義務教育をほどこすものである。現在、CP（脳性まひ）を中心に、ペルテス病、側湾症など、95名を数える。幼稚部、小学部、中学部がおかれている。

(2) 本校

* 県立新潟養護学校

手術や治療が終わっても、まだ元籍校に戻るには体力がじゅうぶん回復していない子どもに、長期にわたり機能訓練をほどこす場合、または手術をする必要はないが、訓練をし、その間並行して勉強をする場合、または障害のため、普通校において勉強が困難であるという場合、ここの養護学校に収容することになる。現在、児童・生徒数は305名を数えている。本分校の在籍者をみると、初期においてはポリオ（セキツイまひ）児が多かった。しかし現在は、医学の進歩とともに急激に減少したが、一方、CP（脳性まひ）児が急増し、その過半数以上をしめるに至った。

2 調査の対象と方法

(1) 分校においては、小学部3年生以上、希望職業とその理由について、アンケート用紙をつくり、中学3年まで全員の子どもたちに記入してもらい提出させた。この職業、および理由は、いくつかの項目をあらかじめ設定してのものでなく、自由に記入させたものである。しかし、分校においては対象となる人数も少ないので、本校の中学生に同様な方法による調査を実施した。（対象数：小中学部190名 高等部45名）

(2) 本校において高等部の生徒に、別のアンケート用紙を用意し、職業希望調査を実施した。これは前記の用紙とやや異なり、小学校からの変化も個々に調べられるように、小、中、高の欄を設定し、記入してもらった。さらにまた選択の理由として、①親や先生など身近な人にすすめられた ②世の中のためになると思ったから ③自分の趣味や身体的理由にあってから ④お金を得て、生活を安定させられるから の4項目を用意し、それに○印をつけさせ理由の処理が簡単になるようにした。さらに障害の自覚と職業希望の関連を知るため「あなたは自分の病気にたいして、将来の職業に不安を感じたのは何才ごろからですか」という項目にも記入してもらった。病類に関しては学校、病院等の資料によった。

(3) 学年別、年齢別、障害別等の職業希望の変化がわかっても、卒業後の実際の職業がどうなっているかわからないと、このような変化に適切な判断が下されないので、卒業後の子どもたちの動向をも調べた。調査の方法は、卒業生の名簿を繰り、記入してあるものについて調べたり、同窓会のおり個々に尋ねたり、知っているものの動向を聞きだしたりした。これは分校だけであったが、一応96名の調査をすることができた。

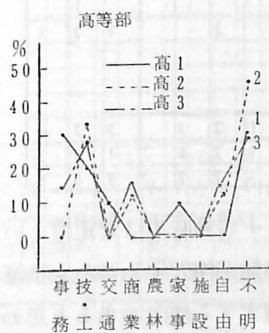
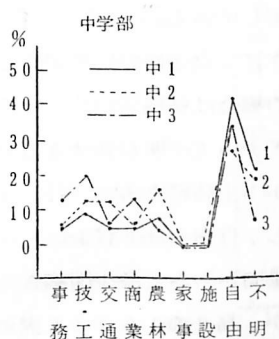
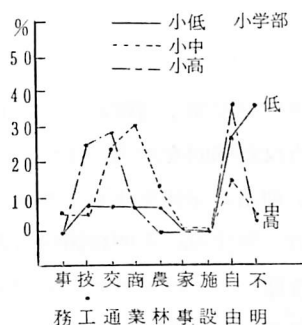
III 調査の結果と考察

1 小学部から高等部まで全体を通じての職業希望の変化

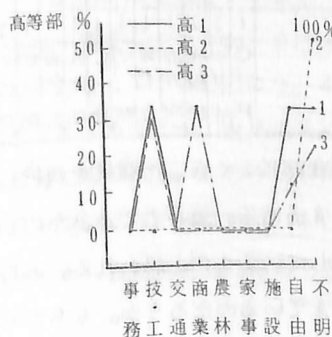
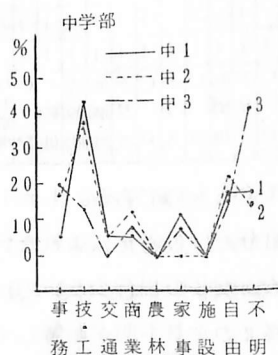
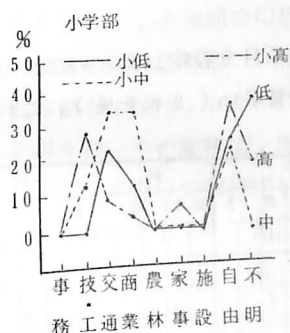
アンケートによる回答を、事務、技術；工業、交通、商業、農林、家事、施設、自由、不明の9項目（職種）に分類し、小学部、中学部、高等部と学部ごとに分け、さらに学年ごとに集計し、図表化したものが、図1、図2である。これを男女別に考察する。

(1) 男子について

全体を通じてみて、小学部においては、「工業」「交通」「商業」「自由」の項目に多く集中してい



(図1) 小学部から高等部までの職業希望の変化—男子—



(図2) 小学部から高等部までの職業希望の変化—女子—

る。見た目にはぱっとしない「事務」「農林」「家事」など、子どもたちには魅力のない存在なのである。ギンズバーグの職業選択の3つの型空想的、暫定的、現実的をとるなら、まさに空想的である。その内容は、パイロットやレーサーであり、野球選手であり歌手である。商業も花屋であつたり、お菓子屋であつたり幻想的、打算的である。しかし中学へ行くと、やはり「家事」は少ないが、農林がすこし頭をもたげ、「交通関係」はひっこみ、「技術・工業」もやや低くなる。このことは、中学時代にレーサーやパイロットなどが現実的でないことに気付きはじめることを表わしている。自己の能力や障害に対して、不安と焦燥を感じ、

さらに自己をみつめる内省的思考が発達してくるからであろう。したがって、

「自由職業」は全体としてややあがる。

たとえば、具体的に運動量の少ない小説家、作曲家、絵かきなどである。そのような職種の中では、身体的障害と関係なく、活動できるからである。

つぎに高等部にくると、小学部ではほとんど見向きもされなかった「事務関係」がアップする。また「技術・工業」もふえてくる。「交通関係」は2・3年で0である。これは自己の障害の程度がわか

り、そのことが意識の中に定着するためと思う。たとえば、体力、脚力がじゅうぶん必要なトラックの運転手など、はっきりだめだと認識してくるのである。「自由」が急激に減るのも現実性に目覚めたためである。しかし、「不明」が多くなるのは高校生が迷いの年でもあることを示す。それも3年になると卒業期を控え減少してくるのは当然である。

(2) 女子について

小学部においては、男子とほぼ同じ傾向を示す。すなわちバレリーナであつたり、スチュアデスであつたり、花屋であつたりする。図2を見ても大まかな曲線はほぼ似ている。中学部では「自由」が減少し「技・工」および「事務」がふえる。この曲線は、卒業生の職業グラフ(図3)

と大へんよく似ている。その意味では、堅実安定型であろう。しかし、3年になると「不明」が増大する。迷いのはしりというべきか。高等部においては、変化の起伏が激しい。とくに2年生の「不明」は100%であり困惑の状態がわかる。

2 高等部生徒の職業希望の変化

高等部は、厳しい実社会へ出発する、学校生活との境目である。そこでもう少

し掘り下げて調べてみることにする。

(1) 各学年の小学時代からの変化

次の表1で見られるように、男子の「事務」では各学年とも小学校にないが中学、高校となるにしたがい増加する。「交通」は各学年とも小学校からだんだん減少するという反対傾向を示す。また「自由」も小学校に多く中・高と経るにつれ減少し、「技術・工業」は増加する。前項の全体を通じての調査と

(表1) 高等部職業希望

	男 子									女 子								
	高 1			高 2			高 3			高 1			高 2			高 3		
	小	中	高	小	中	高	小	中	高	小	中	高	小	中	高	小	中	高
事 務		1	3		1				1									
技・工		1	2	1	2	3	2	2	2	1	1	1					1	3
交 通	3	2	1	2	1												1	
商 業		1			1	1	1		1				2			2	2	3
農 林																		
家 事		1	1															
施 設																		
自 由	4	2		2		1	1	1	1	1	1	1	2	3			3	2
不 明	3	2	3	4	4	4	3	4	2	1	1	1	2	4	7	4	3	2
計	10	10	10	9	9	9	7	7	7	3	3	3	7	7	7	9	9	9

は各学年とも上昇みといえるのでないか、その意味では安定型といえるし、自由が高3において小学部から減少し、これも正常である。高3の商業が増大することも卒業生の動向からみて多少困惑きみである。また不明は、高3を除き小学校より増大する傾向にあると思われるが、高2の100%も翌年になればこの高3のように減少すると思われる。

(2) 職業選択の理由

次に、職業選択の理由について調べてみた。Ⅱの2に記したように、4項目を設定しまとめたものが表2である。これによれば個性や身体のために職業を選んだというのが一番多い(28.9%)。これは

(表2) 高等部障害別職業選択の理由

	男 子												女 子											
	高 1				高 2				高 3				高 1				高 2				高 3			
1 親や先生のすすめ		1				1	1		1			1										1		
2 世の中のためになる	1																						1	
3 自分の趣味や体のため	2	1			1						1	2			1	1						3		1
4 お金を得るため										1		1	1									1		
不 明	1		1	1			3	1		1			1		1		3	1	1	1	1	2		
計	4	2	1	1	1	1	4	1	1	1	2	4	2	1	2	1	3	1	1	1	1	7	1	1
	C	P	ボ	先	骨	血	切	C	片	骨	切	そ	C	脳	損	C	ボ	C	ボ	側	先	C	申	片
	リ	オ	リ	股	友	不		P	ま	不	全	断	P	他	傷	P	オ	オ	オ	湾	脱	P	状	ま
				脱	病	全	断			全	断	他								症	他		腫	ひ

してくるにつれて、自分の好みや、身体的状態によくあった職業を選択してくるものである。しかし、親や先生にすすめられてという場合も13.3%ある。障害者であるため、自分だけの考えによれない場合も多く、不安度がかかなり高いことを意味しているものと思われる。ところが女子の場合少ないのはなぜだろうか。男子の方がそれだけ真剣に考えているのだろうか。もちろん高2の全員不明が影響しているのも理由の一つであるが。また、世のためというのは4.5%で一番少ない。障害者の場合は0かと予

ほぼ一致する。不明を調べると高1を除いて、高2高3とも中学で最高になり、迷いが中学に始まり高校でも根強く尾を引いていることを示している。

つぎに、女子について考えると、
高1の場合は被検者が少ないのと、
高2において不明が多すぎるため
判断が不正確になるが「技・工」

想していたのであるが実際には選択理由とするものがあつた。畔上氏の研究でも高校、大学になると激減する。また全体を通じて、障害別にみた差はあまりないことがわかつた。

(3) 障害別職業希望について

表3の高等部の職業希望で、CP児（脳性まひ）が、かなり意欲的に職業希望を表明していることである。すなわち「商業」、「技術・工業」

（表3） 高等部障害別職業希望

「事務」に希望が多いのだが、次ページ表5、図3で実際の卒業生の動向を見ると、CP児の就職はきわめて難かしく、その門戸が狭いのである。もちろん就職をしているものもあるが単純工である。

	男 子									女 子									主 な 職 業				
	高 1	1			高 2	2			高 3	高 1	高 2	2			高 3								
事 務	1	1		1					1									経理士（男）					
技・工	1				1	1	1	1	1	1						2	1	印刷・電気・編物 （男）（男）（女）					
交 通	1				1																		
商 業								1								2	1	カメラ 店員 （男）（女）					
農 林																							
家 事	1																						
施 設																							
自 由								1	1							1		小説家（男・女）					
不 明	1	1	1		3		1	1	1	1	3	1	1	1	1	2							
計	4	2	1	1	1	1	4	1	1	2	4	2	1	1	1	3	1	1	1	1	1		
	C	P	先	血	骨	切	C	片	骨	切	C	ボ	脳	C	ボ	C	ボ	側	先	そ	C	甲	片
	リ	脱	股	友	不	断	P	ひ	全	断	他	P	オ	傷	P	オ	P	オ	症	脱	他	P	腫
	P	オ	脱	病	全	断	P	ひ	全	断	他	P	オ	傷	P	オ	P	オ	症	脱	他	P	腫

この辺に意識と現実のずれを見るような気がする。CP児で自由業、とくに小説家になろうと考える者もある。CPという特殊な性質上、小児期の幻想的な夢がまだいき続けているのだろうか。

(4) 障害の意義と年令

高等部の生徒は、つぎには荒々しい実社会が目の前にあり、これから一生を托す職業に真剣にならざるを得ない。その意味で、生徒たちが自己の障害のハン

（表4） 障害を意識した年令

ディキャップをいつ頃自覚し、悩んだかを調べてみた。男女合わせて45名中、無回答であつたものは5名にすぎなかつた。他の調査では「不明」の数が多かつたのにこの回答率がよいのは、障害をみな深刻に受けとめ悩ん

年 令	10	11	12	13	14	15	16	17	不明
男 子	2	1	2	3	7	6	2	1	2
女 子		1		4	6	2	3		3

でいることを示している（表4）。これによると、13才～15才のときが多く、最高は14才であり、男女とも一致している。14才は中学2年であるから自己理解がようやく深まろうとしている時期であり、職業の選択にもそれが微妙に影響してくるのだろう。それは中学中頃より、バレリーナになろうとか、歌手になろうとか、レーサーになろうとか、野球選手になろうとか、という空想的希望が徐々に、あるいは急激に減少していることでもわかる。この不安の自覚の年令は、病類別にみても、ほとんど一致している。しかし、中にはCP児のように自覚の早いものもある。CP児は、一般に、障害の程度が重く、身体活動の不自由さを早くから自覚させられるからと思う。

3 卒業生の職場

卒業生の職場をみると男子においては「在家」が一番多い。これは非常に大きな問題である。これを内容別にみると、家事と家業があり、男子にあっては「家事」の大部分をCP児がしめている。このようにCP児は職を得られないのが現実なのである。また障害者にとって「技術・工業」といっても時計や印刷の軽技術者が大部分であり、女子の場合の「技・工」は54%に達し圧倒的に多いが、内容的に

(表5) 障害別卒業生職業

男 子										女 子									
計 %										計 %									
事務	3	2	1	1					7	13.5	会社・公務	3	1	2		1	7	15.9	タイピスト
技・工	8	1	1	4	1				16	30.8	時計・印刷	10	3	6	2	3	24	54.5	和洋裁・編物
交通									0	0	(8) (3)						0	0	(11) (4)
商業	1				1	1			3	6	店員・洗濯	1					1	2.3	
農林					1				1	1.9							0	0	
家事	4	7			3	2	3	19	36.5	家事・家業	2	5	1		1	9	20.4	家事	
施設	1	1		1				3	5.8	(13) (6)							0	0	(8)
自由								0	0			1	1	1		3	6.9	保母・看護婦	
不明								0	0								0	0	(2)
計	17	11	2	11	2	2	7	52	100		16	10	10	3	5	44	100		
病 類	ポリ	C	先	骨	リ	筋	そ			ポリ	C	先	骨	そ					
	オ	P	脱	患	ウ	シ	他			オ	P	脱	患	他					

は和洋裁、編物、紡績に限られている。「自由業」は男子にまったくなく、女子も少ない。女子には「商業」はない。「交通関係」は男女ともない。

これを図表化すると図3のようになり、障害者の職業選択を考えるうえに重要なデータとなり、いろいろなことを考えさせてくれる。

IV 結 び

一般的に障害児の進路意識の決定的な変化は、病気に対して不安が確実となる14才頃を契機に起こることがわかった。それまでは、一般小中学校の職業意識とかわりなく空想的であり、自己の能力や障害に対して、さほど疑念をもたなく明るい。中学になると自覚より障害に対して目をむけ、不安に支配されはじめる。そこで現実的な職業を模索し始める。さらに高等部になると、卒業という事態に直面せねばならず、実務的なものに目がむく一方、はたして自分にとって適職か、不安も非常に増す。しかし、高等部3年となると、不安は残しても、いずれか二者択一を迫られることになり、「不明」が減少する。高等部はまさに受難の時代であり、先輩から教師から、またその他から多くの進路情報が提供される。しかし障害者にとって現実を受け入れられる職場がどれほどあるだろうか。在宅を余儀なくされる場合も多いことを思い合わせ、動揺の大きさが想像できるのである。

引用文献

スーパー著日本職業指導学会訳：職業生活の心理学 誠信書房 (1960)
畔上久雄：職業観の発達 (教育心理学講座6) 金子書房 P. 218

